Syrup

絹川 嶺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｓｙｒｕｐ

【Ｎコード】

Ｎ３８４８Ｈ

【作者名】

絹川　嶺

【あらすじ】

昌と佳代子、双子の日々を綴ります。

0）　父からのメール

６月２３日　　ＡＭ００：４８受信
Ｆｒｏｍ：廣瀬（ヒロセ）　和也（カズナリ）
件名：愛しい我が息子・娘へ！！
本文：

昌、佳代子へ

家を離れて三ヶ月経つが元気にやっているか？
高校生になって暫く経ったけど、新しい環境には慣れたかい？
先生や友達とも上手くやれているかい？
昌も佳代子も人見知りな所があるから少し心配だよ
（親馬鹿かな？親馬鹿で結構！！）

私は相変わらずだよ。
今も書類の山と化した会社のＰＣからメールを打っている
日付が変わってもまだ仕事の終りが見えない
仕事が忙しくて中々連絡が取れなくてごめんな
（まぁ、この不況なら仕事はあった方が良いんだろうが）

彼女も相変わらずだよ
今もまだ家事が苦手なままだ
毎日毎日、台所で食材と格闘しているよ
少しずつ進歩はしているんだけどね…まだまだ…
それでも「二人に美味しいって言って貰うんだ」って毎日頑張ってる

（まぁ、昨日も鍋を焦がしたんだが…私が言った事は内緒にしてくれ）

以前にも言ったけど私と彼女の事を気遣ってくれるのは嬉しい
嬉しいし感謝しているが、同時に申し訳ない気持で一杯だよ
実の息子と娘に気を遣わせるなんて父親失格だね
家を出て三ヶ月になるが、もっと離れている様な気がするよ

今思えば辛い時や苦しい時は笑って誤魔化す癖があったね
家を出るって言われた日も二人はニコニコ笑っていたけど
本当は苦しかったのかい？辛かったのかい？
そう考えると情けなくなって来るよ…気付けなくてごめんな
母さんが亡くなった時もあんな風に笑っていたのにな…

母さんが亡くなって五年が経ち
彼女を私の妻にしてから半年が経つ
二人が家を出たのも、やっぱり彼女が原因なんだろう？
（自分の家に他人が入って来るのは辛かった、よな…）
別に彼女の事を「新しい母さん」と思って欲しい訳じゃない
ただ、家族の一員として皆一緒に暮らしたいんだ
そろそろ、戻って来ても良いんじゃないか？
（勿論、無理強いするつもりは無いからな！！）

私も彼女も二人が帰って来る日を待っているよ
それが来年であっても再来年であっても、ずっと待ってる
どんなに離れていたって、私の大事な家族だからね
昌も佳代子も体には気を付けて
（ってこの時間にメール打ってる俺が言ってもね…）
二人とも、愛しているよ！！

２００９年６月２２日　廣瀬　和也

1）　バナナジャム

甘い匂いがする
僕は布団の中で大きく伸びをする
シーツを手で滑らせていく
僕の隣はまだ、少し暖かかった

頭を掻きながら台所へと向かう
甘い匂いが一層強くなる
お菓子の、匂い
この家では日常的な匂いだ

彼女は台所に立っていた
鍋をゆっくりゆっくり、大事そうに掻き混ぜている
起きたままの姿で（彼女の場合は下着姿で）台所に立つ姿は
何だか普通じゃないよな、とぼんやり考えていると
彼女が僕に気が付き笑い掛ける

「おはよう、昌」
「おはよう、佳代子」

再び彼女は鍋へと視線を戻す
彼女は今、至福の時間の真っ最中
それを邪魔するつもりも無かったので
僕は僕の用意をする
毎朝、僕は紅茶とヨーグルトを用意する
市販のプレーンヨーグルトを器に移す
茶葉が入っている容器を開けると
紅茶の良い匂いが鼻を抜ける

お揃いのカップを二つ、たっぷりの砂糖とミルク
用意してる際にカップが少し欠けているのに気付いた

「カップ、少し欠けてる」
「今日、帰り際に買って帰ろ」
「うん」

彼女は話してる時も僕を見ない
（お気に入りのカップだったから少し落ち込んでいる様だけど）
それでもまだ彼女は至福な時間
鍋の中身を可愛らしい小さな瓶に注いでいる
僕等のと、大家さんの中谷さんのと、西脇先生のと、親の分
彼女が四つのビンを用意する時は必ずジャムと決まっている
今日は…多分、バナナジャム
注ぎ終えると彼女は、ようやく僕の方を向いた

「お待たせ、朝ご飯、食べよ」
「うん」
「今日は黒糖トーストとバナナジャムでーす」
「ヨーグルトにジャム入れても美味しそう」
「あ、それ良いね」

出来たばかりのバナナジャムを鍋からすくい
（瓶に入り切らなかった分だ）
トーストへたっぷりと塗りかぶり付く
ジャムはまだ熱くて、バナナはトロトロで、甘くって
僕は幸せの溜息をこぼす

「美味しい」
「ほんと？」

「ほんと」
「中谷さんと先生、喜ぶかな」
「うん、きっと喜ぶね」

彼女は嬉しそうに頷く
喜ぶ彼女を見て僕も嬉しくなる
僕にとっての至福のひとときだった

僕の名前は廣瀬（ヒロセ）　昌（ショウ）
彼女の名前は廣瀬（ヒロセ）　佳代子（カヨコ）
僕等は双子だ、今は二人で暮らしている
男の子と女の子の一卵性双生児は珍しいって言われているけど
変わっている所はそれだけで、
僕は絵を描くのが好きな普通の男の子で
彼女はお菓子作りが好きな普通の女の子だ

朝五時に起きてパンやジャムを作り出すのも
【普通】の許容範囲だろうか？
それが普通じゃないなら、前言撤回しなければならないし
それを普通と考えている僕もきっと普通じゃないんだろう

まぁ、でも、本当に、ただ、それだけ

2）　木ノ瀬　綾乃

朝食を済ませた後、佳代子は慌ただしく準備を始める
髪をとかしたり制服を着たり歯を磨いたり化粧をしたり…
僕はそれを横目に見ながら鞄に教科書や筆記用具を入れていく
（佳代子も僕も同じクラスだから、二人分用意する）

そろそろ出る時間だけど、今日は時間通りに出れそうにない
今日は朝食を食べ始める時間も食べるペースも遅かったし
何より……台所に並ぶ三つの小瓶
（さっきバナナジャムを入れていたヤツだ）
佳代子は多分、あれらをラッピングするんだろうし
（そういうのは手を抜けない性質なんだ）
しかも一つは宅配便で出さなきゃいけないから
学校へ行く前に営業支店に寄らなければいけない
今日は遅刻決定だな、と思いながらのんびりとソファでくつろぐ

また横目で佳代子を見る
準備をし終え、こちらへやって来る
手にはリボンと可愛い紙袋を持っている

「急いでやるから、ちょっと待っててて」
「うん」

佳代子は「先に学校に行ってて」とは言わない
僕も「先に学校に行ってる」とは言わない
遅れるなら一緒に遅れても良いと思うし
一人置いたまま先に行こうとも思わない
それが当たり前だしお互いがそう思ってる

佳代子は一つ一つ丁寧にラッピングしていく
表情はとても嬉しそうで僕も嬉しくなる
二つ目が出来あがった所で、もう一つはそのまま紙袋へ入れる
リボンの包装も無し、紙袋への入れ方も乱暴だ
表情も冷たく、強張っている
僕はソファから立ち上がり佳代子の手を握る

「佳代子…佳代、そろそろ行こう」
「うん」

僕等は額をくっつけあい、目を閉じる
心がざわついてる、僕も、佳代子も
胸が締め付けられる様な…息が苦しくなる様な…
佳代子は少し手が震えてる
僕はそれに気付き繋ぐ手に少し力を入れる
顔を近付けてキスをした

鍵を閉めて家を出る
まだ手を繋いだままだ
六月後半…もう夏へと向かっても良い筈なのに
まだまだ雨の日々が続いてる
（今日は雨が降って無いけど分厚い雲で覆われている）

僕と佳代子はのろのろした速度で歩き出す
歩いてすぐの場所に学校があっても
中々走る気になれないのは、僕等の性格だろう
（緩やかな坂の上に学校が見えている）
通勤や通学時間はもう過ぎていて道路はあまり人が居ない
道路の木々を見上げると、葉の緑が鮮やかで目を細める

佳代子も追って木々を見上げる
入学した時も桜の木々をこうやって二人して見上げた
もう、ずっとずっと前の話みたいに思えるのは何故だろう

学校の傍にある宅配便の営業所に入る
佳代子は店の外で待っている
僕はバナナジャムが入った紙袋を宅配に出す
宛先は【廣瀬　和也】と【木ノ瀬　綾乃】と書く
此処に【廣瀬　綾乃】と書く勇気は、まだ、無い

店から出ると佳代子が心配そうに見上げてくる
僕は佳代子の手を握る

「昌、指が冷たくなってる」

暖める様に両手で僕の手を包む
六月でジメジメとして汗ばむ季節なのに
僕の手は冷たくなっていた

「大丈夫、大丈夫だから…」

自分自身に言い聞かせる様に呟く
佳代子も頷き、僕の手を包む手に力を入れる
僕も佳代子に暖めて貰った手を見つめる
血の気が戻ってる

僕は佳代子の手を握って学校へ歩き出す
佳代子は不安そうな顔をしたけど、気付かないフリをした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3848h/

Syrup

2010年10月10日04時59分発行